

# 戦後の成功ブームと成功（出世）観

——戦前の立身出世主義を比較基準にして——

竹 内 洋

## I 戦後の成功ブーム

『週刊朝日』1953年8月23日号は、「サラリーマン読本成功への道」（中野好夫他）という特集を組んでいる。その冒頭は、つぎのようにのべている。

あまり目には立たないが……、近ごろ奇妙な出版現象がある。というのは、ここ二、三年、いわゆる財界人、経営者の大物といわれる人たちの自伝、回想、訓話といった種類のものが突に手軽く、実におびただしく出ているのだ。

『週刊朝日』のこの特集自体が、戦後の成功ブームのはじまりを示している。

あとで詳しくみるけれども、戦後もっともはやく成功特集を組んだ雑誌は、『オール生活』1951年7月号（図1）であるが、それ以降いくつかの週刊誌や雑誌上に「成功」特集が載るようになる。たとえば、「成功と修養のダイジェスト」（『丸』1954年4月号）「新春出世物語」（『人物往来』1955年1月号）「成功特集」（『知性』1956年12月号）「戦後成功読本」（『サンデー毎日』1957年1月1日号）などである。

1955年に『私は成功した』（C. A. Palmer, 新思潮編集部訳編, 新思潮社）が出版されているが、この本の最後の広告欄に、つぎのような読者むけ広告が載っている。

「私は成功した」は各方面から非常な讃辞を頂きました。つきましては、現在活躍中の各界の人物中から読者に選んで頂いて、日本版、東洋版、欧州版、「私は成功した」を出版したいとします。……十人をお選びになって、御通知下されば幸甚です（傍点引用者）。

『私は成功した』の日本版、東洋版、欧州版を出版したいというこの広告は、『西国立志編』（1871年）の刊行と爆発的売れゆきとが『日本立志編』『小学立志編』『近世女子立志編』『明治立志編』『東洋立志編』などの刊行をまねいた明治初期の立志編ブームを彷彿させる。戦後の成功ブームを物語るものといえる。『知性』1956年12月号、『私の履歴書4』（1957年）巻頭言は、はっきりと、いまの出版界は「成功ものブーム」であるとのべている<sup>1)</sup>。

1) 「成功シリーズ完全整理 成功のための六つの基礎知識」『知性』1956年12月号, 116頁, 日本経済新聞社編『私の履歴書4』日本経済新聞社, 1957年, 1頁。



図1 雑誌による戦後はじめての成功特集

表1 戦後成功読本年次別発刊  
(種類)数  
(1949~1965年)

発刊年	発刊(種類)数
1949	0
1950	0
1951	2
1952	0
1953	4
1954	1
1955	2
1956	14
1957	8
1958	5
1959	5
1960	5
1961	9
1962	5
1963	8
1964	8
1965	6

(資料出所)

国立国会図書館件名目録カード「成功法」より作成。

表1は、国立国会図書館件名目録「成功法」によって作成した成功に関する書籍の年次別発刊(種類)数を示したものである。「成功法」に分類される書物が1956年にもっとも多く刊行されていることは、1956年をピークとしてその前後に成功ブームがあったことを実証しよう。年次が下がるにつれて全体の書籍刊行の種類が多くなることを斟酌すれば、1956年における14種類の「成功法」の書籍の刊行は、大変多いとみてよいだろう。

日露戦争前後の成功ブーム<sup>2)</sup>ほどの規模ではないにしても、1956年前後に戦後の成功ブームがあったとみることができよう。

このような戦後における成功ブーム再燃の様子は、戦前に「成功雑誌」という俗称があった『実業之日本』他多くの成功読本を出版した実業之日本社の戦後の出版史に、みることができる。1957年6月3日の『実業之日本』創刊60周年記念パーティで、実業之日本社社長増田義彦は、つぎのような挨拶をしている。

2) 日露戦争前後の成功ブームについては、竹内洋「立身出世主義の系譜と論理—明治期を中心に—」関西大学社会学部紀要, V. 7, N. 1, 1975年, 41~45頁参照。

## 戦後の成功ブームと成功（出世）観（竹内）

……父（増田義一——引用者）が一貫して唱えましたのは努力による成功でありました。『実業之日本』は成功雑誌といわれました。「増田は成功を説いて成功した」などと申されたのですが、その根本にあるものは個人の成功と社会の福祉の一致の考え方でした。『実業之日本』の「実業」という言葉もそこにあったのでした。実業というのはただの金もうけではない、実業にはげんで国家社会のためになる、その結果自分も儲けさせてもらう、自分で働くことによって社会も富み、その余徳として自分もうるおう、これが「実業」である。こおいう考え、これは渋沢青淵先生などのお考えに教えられるところが多かったと思うのですが、このような考え方は、思想の移り変りによりまして、時代遅れといわれ、資本主義勃興期の楽観論とされるようになってきたのであります。しかし、今日新しい資本主義の黎明と共に再びこの実業の精神が脚光をあびる時代が来るのではないか……<sup>3)</sup>（傍点引用者）。

ここで、戦後の資本主義の復興とともに『実業之日本』の精神が「再び」「脚光をあびる」と、誇り高く語られている。

このような実業之日本社における戦前的出版精神の復興は、カーネギー（A. Carnegie）の“Empire of Business”が1953年に『実業成功への道』（山田勝人訳）として再刊されたことにみれる。カーネギーのこの本は、1902年に小池靖一訳『実業之帝国』として実業之日本社から刊行され、成功の秘訣を説いた本と広告されたが、発売後三日で売り切れ、数10版を重ねたというエピソードがある。そしてこの本の広告が決定的なヒントとなって以後「成功」は実業之日本社の出版を方向づける主調音となった<sup>4)</sup>。その意味で、カーネギーの本の1953年の再刊は、実業之日本社が「成功」という戦前的編集方針に復帰したことの象徴といえる。実際、『実業之日本』は、戦前の同誌が主要記事とした努力奮闘伝、成功などを1953年1月1日号より再び掲載した。特集「一業をつらぬいた人々」（同号）「大学も出ないで会社重役になった人々」（同年3月15日号）などが、それである。他方では、実業之日本社は、戦後新しく娯楽雑誌『ホープ』を創刊（1946年）した。だが『ホープ』の売れ行き好調は一時的で、しだいに後退した。そこで『ホープ』は、1951年6月より『オール生活』と改題され、内容も生活指導雑誌に変わった。そして、はやくも翌月（7月）号では、「新成功指針」の特集が組まれた（図1）。藤原銀次郎（「若い人の成功行程」）、小林一三（「ここに出世の近道がある」）などが寄稿している。単行本も1951年に、『サラリーマン成功処世法』（三上泰次）が刊行されている。

このような実業之日本社の戦後出版史は、戦前の立身出世主義の戦後的復興を先行的に示している。

3) 実業之日本社編『実業之日本社七十年史』実業之日本社、1967年、178頁。

4) 同書、18～21頁。

## Ⅱ 戦後成功ブームの経済的・文化的ミリュー

では1956年前後という時期に、なぜ成功ブームが生じたか。この「なぜ」をここでは、経済的ミリューと文化的ミリューとの関連で考えよう。戦後史をおおまかにみれば、1955年を境目にして前後10年は対照的である。両者の経済的・文化的環境は異なっている。経済的には、1955年前10年は飢えの時代で、1955年後10年は回復と繁栄の時代である。すでにみたように、戦後の成功ブームのピークは1956年であるが、時期的に戦後の経済的・文化的ミリューの変化点に位置している。戦後の成功ブームは、1955年後変化した経済的・文化的ミリューに関連していることが推測されよう。

はじめに経済的ミリューとの関連をみよう。

敗戦直後の衣食住の飢餓状態の時期は、生理的欲求をみたすのに精一杯であり、高次の社会的欲求とかかわるところの多い上昇移動は、関心の水面に達しない。ところが1950年の朝鮮戦争による特需景気を経て、1955年頃からいちじるしい経済発展があった。1955～57年は「神武景気」といわれ、「日本経済の成長と近代化」を副題にした1956年の『経済白書』には、「もはや『戦後』ではない」というフレーズが登場した<sup>5)</sup>。経済復興、経済発展によって低次の「生理的欲求」や「安全の欲求」が充足され、高次の「尊敬の欲求」や「自己実現の欲求」が活性化する<sup>6)</sup>。後者の高次欲求は、上昇移動観念と密接なかかわりをもっている。また、急速な経済の復興と発展は、社会移動とくに上昇移動を増大させるが、一部の上層を除いて敗戦によって成層構造が崩壊し、「下向的平準化」<sup>7)</sup>がすすんだから、上昇移動者は華々しさをもって人々の目に映り、上昇移動観念が湧出させられた。

つぎに文化的ミリューとの関連をみよう。

戦前の価値体系は、敗戦とともに凋落した。だが凋落は一時的で、戦前の価値体系は再び顕在化した。もちろん価値は、同じものが顕在化するわけではなく、なんらかの変容をとまないつつ顕在化するのだが。戦前の価値体系の再顕在化は、1950年頃からの占領政策の変化を中心とした上からの価値操作によるところが大きいだが、それまでの凋落が内発的ではなく、敗戦による戦前の価値体系への一時的反動の面もあったからであろう。

こうして1945～52年にかけては、伝統からの断絶が主調音であったが、1952年以降、チャンバラ映画、歌舞伎の復活、明治天皇ものの映画化などにみられるように、しだいに復古調、逆コースの時代となった。このような戦前の価値体系の再顕在化という時代雰囲気なかで、戦前の価値

5) そこではつぎのようにのべられている「戦後日本経済の回復の速かさには誠に万人の意表外にでるものがあつた。……もはや『戦後』ではない。われわれはいまや異つた事態に当面しようとしている。回復を通じての成長は終つた。今後の成長は近代化によって支えられる」(経済企画庁編『経済白書(昭和31年度)』至誠堂、1956年、42頁)。

6) A. H. Maslow, *Motivation and Personality*, Harper & Row, 1954, 小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率短期大学出版部、1971年、119～172頁参照。

7) 石田雄による用語(『日本近代史大系8 破局と平和』東大出版、1968年、198～199頁)。

## 戦後の成功ブームと成功（出世）観（竹内）

値意識である立身出世主義が成功ブームとして再顕在化したのだといえる。

### Ⅲ 戦後の成功ブームにみられる成功（出世）観

これまでのべてきた1956年前後の戦後の成功ブーム期を時代的レファレントにして、以下では戦後に特徴的な成功（出世）観をみていこう。

ここで注意されるべきは、価値意識は恒常的性格をもっているもので、戦後の成功（出世）観の多くは戦前のそれを踏襲しており、両者は多くの面で連続していることである。それゆえ戦後の成功読本の著者の一人は、敗戦を契機に思想、生活様式、風俗などが大きく変わり、

それにつれて、成功というものについての考え方や成功の方法も変化したことは事実であるが、八・一五（敗戦記念日）以前の考え方や成功の方法は悉く古くなり、無意味になったわけではない<sup>8)</sup>。

とのべる。また、戦前の成功読本がこの時期に多く再刊された<sup>9)</sup>ことも、成功（出世）をめぐっての観念の戦前と戦後の連続性を示そう。

だが、当然そこには不連続面もある。不連続面の考察にしても、戦前の立身出世主義を比較基準にしてはじめて可能である。それゆえ戦後の成功（出世）観の特徴は、戦前の立身出世主義を抜きにしては解明できない。以下で戦前の成功（出世）観についてのべるところが多い所以である。しかし、ここでは、戦後に特徴的な成功（出世）観が対象なので、戦前の立身出世主義はそのかぎり比較参照するにすぎない。連続面についてはのべない。

このような課題設定から、ともすると、成功（出世）観は戦前と戦後で大変動をしたという印象をあたえるかもしれないが、それは、本稿が不連続面だけを抽出しているからであって、基層の部分では連続していること、不連続面といっても戦後の創発的（emergent）観念であるよりも戦前の成功（出世）観念を原型とした変容である場合が多いことには注意したい。

戦後の成功ブーム期にみられる戦前と不連続な成功（出世）観としてつぎの4点が重要であろう<sup>10)</sup>。

- ① 反上昇移動規範の相対的喪失と、成功の手段が道徳（人格、品性）と無関係に戦術としてアメリカ社会心理学流に考えられるようになってきたこと。

---

8) 鋤田研一『成功への二十の道』大泉書店、1957年、17頁。

9) たとえば、戦前の処世修養論であると同時に成功読本であったベスト・セラー『青年と修養』（増田義一）は、1953年に再刊されている。再刊にあたって「……初版以来すでに四十年の歳月を経てはいるが、その内容は時代の推移によってその価値を減ずるものではなく、戦後におけるわが国経済の逼迫、思想の動揺、生活の困難に曝された国民にとって、むしろその必要性を更に加えている」（320頁）とのべられている。ちなみに筆者（竹内）の手元にあるそれは1960年発行9版であり、戦前の成功読本が戦後においても大きな影響力をもったことを示そう。

10) 立身出世が精神主義ではなく、技術論として説かれたり、金銭が成功（出世）のシンボルとなってきたことなど以下で戦後の成功（出世）観の特徴としてのべられるいくつかの点は、すでに大正時代にあらわれている（たとえば南博編『大正文化』勁草書房、1965年、207～217頁参照）。だが、それらは大正時代における成功（出世）をめぐっての支配的観念であったとはいえないとおもう。

- ②大きな成功（出世）＝有名というコンセプトが台頭してきたこと。
  - ③成功（出世）の尺度がしだいに金銭になってきたこと。
  - ④安定と消費に動機づけられた小文字の出世主義が強くなってきたこと。
- それぞれについてみよう。

(1) 反上昇移動規範の相対的喪失と、成功の手段が道徳（人格、品性）と無関係に戦術としてアメリカ社会心理学流に考えられるようになってきたこと

安田三郎は、戦前社会を一概に立身出世主義の社会ととらえるべきではない、という注目すべき提議をしている。安田は、明治中期以降の立身出世の特徴を立身出世を否定する「規範」とそれを追求する「欲求」の併存と、とらえている。立身出世を否定する規範の例証に戦前の模範的人物「二宮金次郎」をあげ、それは庶民の立身出世エネルギーを「上昇」にはなく、「勤労」に封じこめたものであって「反立身出世主義のシンボル」であった<sup>11)</sup>、とする。また、研究書ではないが戦後ベスト・セラーになった『出世——友よこの道で行こう——』の著者である永田久光も、戦前社会では出世は公に肯定されなかった、という見解をとっている。「修身」は「世に出る」ことを否定し、虫けらや石ころで人生を終ることが幸福であり、意義があり、『出世』は道徳に反したことであり、恥ずべき行為」と、教えた<sup>12)</sup>という。

代表的修身教科書におけるひろい意味での立身出世モラル（立志、学問・勉学、努力・勤勉、自立・自営、節約・節制）の割合は、図2にみられるように明治13（1880）～14年（1881）をピ

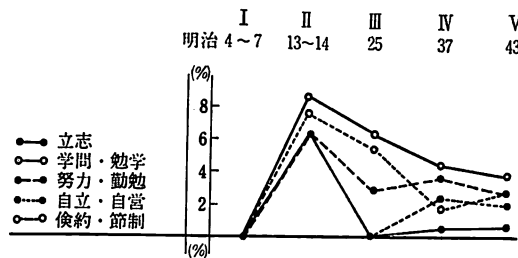


図2 代表的修身教科書にみられる立身出世モラルの比重  
 (資料出所) 見田宗介「明治体制の価値体系と信念体系」福武直・松島静雄編『集団と社会心理』中央公論社、1967年、139頁。

ークにして、しだいに減っている。立身出世モラルを端的に示す「立志」の徳目の代表的修身教科書にしめる割合をみれば、そのような傾向は、一層はっきりする。また、1891年時の文部大臣大木喬任は、訓令のなかで、

小学校ニ於テ往々教育ノ道ヲ誤リ其弊ヤ子弟ヲシテ家業ヲ忌ミ父兄ヲ侮リ徒ニ衣食ノ美ヲ

11) 安田三郎『社会移動の研究』東大出版、1971年、423頁。

12) 永田久光『出世——友よこの道で行こう——』光文社、1956年、45～46頁。

欲シ又貧弱ノ者モ唯々学問ニ従事スルトキハ一身ノ榮達期スヘシト信シ其資力ヲ計ラスシテ歲月ヲ徒費シ其極一身一家ノ不幸一國ノ不利ヲ醸スニ至ルハ目下教育上ノ通弊ナリと、立身出世に否定的な警告を出している。そして日露戦争以降「己の分を知らずに、及びもなき野心を懐く」「不健全な野心」が警告され、「己の才幹技倆に応じた健全な向上心」が勧められ<sup>13)</sup>「積極的精神に充たる無名の人物」「緑の下の方持」「土中に埋れたる国家の柱石」<sup>14)</sup>という人間像がさかんに賞揚されるようになる。

立身出世をめぐる上からの規範のこのような変化は、支配層にとって体制の建設期（明治初期）には、それは建設のための自発的協力のエネルギーとして役立つけれども、体制の秩序が固まると（明治中期以降）、庶民が庶民として体制に貢献することが重要になり、庶民の立身出世熱は危険なエネルギーとなってくるからである。

このようにみれば、明治中期以降立身出世を奨励する上からの規範はなかったとする安田三郎の見解が裏づけられるかにみえる。

しかし、立身出世に関する「規範」と「欲求」を矛盾しながら併存すると把握するだけでは、矛盾の析出は高く評価されるけれども、静態的解明にとどまろう。「規範」と「欲求」の関係は、図3の三つの型で示されよう。(a)は両者がまったく重なり合う場合、(b)はもっともよくある型で、両者が部分的に重なり合う場合、(c)は両者が背馳する場合である。だが(c)の場合は、「規範」と「欲求」のそれぞれの方向から接近圧力が生じ、型(c)は(b)に近づく。このような規範と欲求の関係から立身出世をめぐる規範について考えれば、「金次郎主義」に代表される上昇移動ではなく、勤労を奨励した反立身出世の規範も下における強い欲求である立身出世をなんらかのかたちでとりこんでいたはずだ、という索出仮説となる。

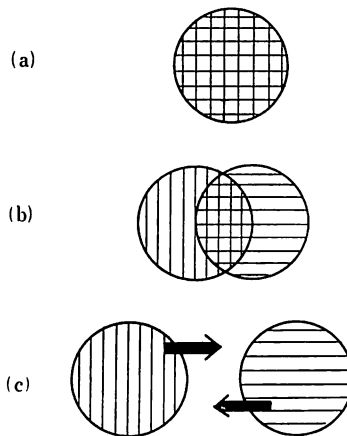


図3 「規範」と「欲求」の三類型

事実はまさしくそのとおりである。二宮金次郎における孝行、勤労、勉学、儉約は、100パーセント目的価値として意義づけられたわけではない。二宮尊徳ではなく、二宮金次郎として説かれた国定第3期修身教科書（1918～1932年）においても、「金次郎は、せいだして、はたらいて、しまいには、えらい人になりました<sup>15)</sup>」（傍点引用者）と、のべられている。また、同教科書巻四「第四 志をたてよ」は、「これから秀吉はだんだん出世をしました」と結ばれている。もし上からの規範が完全に反上昇移動規範であったなら、「出世」という言葉

13) 大谷靖「才幹に相應せる立身法」『成功』第18巻5号、1906年、44頁。

14) 西内天行『地方革新講話』、鹿野正直『資本主義形成期の秩序意識』筑摩書房、1969年、476頁より引用。

15) 『尋常小学修身書巻三』（国定第三期）「第五 がくもん」

が修身教科書上にあらわれることはなかったであろう。二宮金次郎の勤勞，儉約が立身出世の手段価値の側面をまったくもたず，目的価値として説かれるのは，国定第5期修身教科書（1941～1945年）の「一つぶの米」（初等科修身一）である。国定第4期修身教科書（1933～1940年）は，その過渡期<sup>16)</sup>とみなされる。

したがって，明治中期以降における上からの規範は完全な反立身出世規範だったとはいえない，そうなったのは，1930年以降のフェシズム期であった<sup>17)</sup>といえよう。

たしかに国定修身教科書では，二宮尊徳ではなく，二宮金次郎で説かれたから，勤勞，儉約は目的価値として説かれた面が多かったとはいえる。「尊徳」で説かれるときは，功成りとげた尊徳に光があてられ，それが金次郎時代の勤勞，儉約にあたったという論理をとる<sup>18)</sup>のにたいし，「金次郎」で説かれるときには，功成りとげた尊徳は姿を消し，金次郎時代の勤勞，儉約がそれ自体価値あるものと説かれるからである。だが，そこに立身出世規範がなかったわけではないことは，すでにみた。微かではあったとしても，庶民における立身出世の強い欲求は，そのような側面を見逃すはずはなく，「玉虫色」的拡大解釈がなされたであろうことは，想像に難くない<sup>20)</sup>。その意味で，二宮金次郎は，一面では「反」立身出世主義のシンボルであり，他面では立身出世主義のシンボルのドッペルゲンガー（Doppelgänger）であったのではなかろうか。これは戦前

16) 『尋常小学修身書巻三』（国定第四期）「六 かくもん」ではつぎのようにのべられている。

「……二十さいの時，金次郎は，あれはた自分の家へもどりました。そうして，一生けんめいにはたらいて田や畠を買ひもどし，家もさかんにしました。また，世のため，人のためにつくして，後々までもたつとばれるりっぱな人になりました」（傍点引用者）。

国定第三期修身教科書では本文でみたように勤勞は「えらい人」と関係させて説かれているが，第四期修身教科書では「りっぱな人」と関連させて説かれている。「えらい人」と「りっぱな人」とは似ているようでニューアンスがちがう。前者は，富，地位などの世俗的価値の体现者，後者は道徳的価値の体现者という意味が強いのではなかろうか。そうだとすれば，勤勞が「えらい人」とのかかわりではなく「りっぱな人」と関連させられて説かれていく過程は，上昇移動アスピレーションが抑圧されていく過程といえよう。

17) 経営史学者森川英正は、『日本型経営の源流』（東洋経済新報社，1973年）のなかでつぎのような体験をのべている。

森川は1936年東京陸軍幼年学校に入学した。そこで上級生から校歌の歌詞が変更になったことを聞いたという。「……名を万代に残さなん」という歌詞は，「名を残す」という点で問題があるとされ，歌詞が「八紘一字のいしづえと，ただ殉忠に散りゆかん」と変更になったことを聞いた（同書，87～88頁）という。これは1930年代のフェシズム期に反立身出世規範が大変強くなったことを示すひとつのエピソードといえる。

18) 京都府教育会中竹野能野三郡部会編『尋常小学修身書巻四』（1892年）「二宮尊徳翁ノ偉業」は，「勤儉自ラ革鞋ヲ作ルニ至ル。其ノ一生ノ大功業ハ一ニ比ノ勤儉ノ二字ヨリ，湧キ出デタル結果ナリ」（同書，四十九丁）とのべている。「勤儉」が「大功業」のいわば手段的価値としてのべられている。

もっとも検定教科書時代にも「金次郎」で登場している教科書もないわけではない。だが，国定教科書になると「尊徳」ではなく，「金次郎」に統一されることが重要である。

20) たとえば堺利彦は国定第一期修身教科書についての評論のなかで，「二宮金次郎の事が大分沢山書いてある。貧乏人でも勉強さへすれば『えらい人』になれると云う訳だ。今の謂はゆる成功論の代表だ」（『小学修身書漫評』『週刊平民新聞』52号，1904年11月6日）とのべている。二宮金次郎はやはり立志譚として受けとめられている。



### 戦後の成功ブームと成功（出世）観（竹内）

の日本社会で立身出世をめぐる、正負両義的な価値づけが存在した<sup>21)</sup>ことを象徴的に示すものといえる。

戦前において成功（出世）が単純に肯定されなく、道徳的要素（人格、品性など）が付加されてはじめて肯定されたり、成功（出世）の定義がすくなくともタテマエとしてはしばしば曖昧化された<sup>22)</sup>のは、立身出世にたいするアンビバレンスな価値づけによるところが大きいとおもわれる。

戦後欲望規制規範は、大きく後退し、「欲望自然主義」<sup>23)</sup>はいちじるしく昂進した。題名すら「警視庁からおしかりを受けやしないかと、ピクピク」<sup>24)</sup>した『欲望——その底にうごめく心理——』（望月衛、カッパブックス、1955年）が出版され、ベスト・セラーになったことは欲望規制をめぐる戦前と戦後の価値意識の変容をあざやかに示すものであろう。上昇移動をめぐる規範も例外ではなかった。反立身出世規範が相対的に後退したときの成功ブームにおいては、成功（出世）が道徳的要素を付加して語られる必要がなくなる。またそうであればあるほど純粋に術として認識される。かくて、

ただ頭のよいことや、よく働くことが伸びる術でもなければ、上役やまわりに好かれることが成功の早道になるものでもない。伸びる術、成功する術というものがあるのである<sup>25)</sup>（傍点引用者）

と、いわれる。勤勉、誠実の精神主義、道徳主義は、退けられ、「伸びる術」「成功する術」が説かれ、成功は「努力ではない頭の使い方だ」<sup>26)</sup>とされる。そして、『『修業時代』よさようなら——マスコミ時代の出世術——』<sup>27)</sup>が週刊紙に登場する。このように成功（出世）の方法が術として考えられることが極ると、「努力しないで出世する方法」（ミュージカル喜劇）とか「日本一のゴマすり男」（東宝映画、1965年）のような「C調出世法」<sup>28)</sup>の登場となる。他方では、戦前版成功読本は、「私はこうして成功した」というかたちをとったのにたいし、戦後の成功読本は「成功は君のものだ」<sup>29)</sup>「人間商品の販売術」<sup>30)</sup>と積極的なかたちをとる。ここにも成功（出世）の方法

21) この点について詳しくは、竹内洋「近代日本のアスピレーション構造」柴野昌山・麻生誠編『変動社会の人間形成』アカデミア出版会、1977年、とくに第3節の末「立身出世主義をめぐる正負両義的価値づけ」参照。

22) 竹内洋、前掲論文（1975年）、46頁。

23) 「欲望自然主義」は神島二郎によってつくられた用語（『近代日本の精神構造』岩波書店、1961年、177～194頁）であるが、ここでは安田三郎の再解釈「人間の自然の性情の容認」（安田三郎、前掲書、403頁）という広い意味でこの用語をつかう。

24) 神吉晴夫「私の戦後史：創作出版の三十年⑨」『週刊読書人』1975年7月7日号。

25) 三上泰治『サラリーマン成功処世法』実業之日本社、1951年、1頁。

26) S. Mead『苦勞なしに成功する世渡り心理学』鱗書房、1955年、3頁。

27) 『週刊新潮』1957年7月22日号。そこではつぎのようにのべられている。

「桃、栗三年、柿八年——なにごととも年期を入れなければ実を結ばないというのが、これまでの常識だった。ところが最近ではシロウトが一足飛びに売り出すありさま。一方では“修業ノン・ストップ時代”が要求されているようである。一体、“年期”はモノをいわなくなったのだろうか？」（76頁）。

28) いいだも「現代出世論」『若い仲間』第1巻9号、1964年、66頁。

29) 遠藤健一『成功は君のものだ——セールスマン時代の商魂——』光文社、1956年。

30) 永田久光『成功読本：人間商品の販売術』東西文明社、1956年。

の脱道徳化の影響がみられる。

このような成功(出世)の方法における脱道徳化の空洞を埋めたものが「人間科学ノ」であった。

むしろ、今日ではあらゆる学問の成果を結集して人間の能力を最大に開発し、その行動を徹底的に合理化しようという時代である。

だから、仕事でも生活でも、そのスタートにおいて科学の力をいかにうまく利用するかで、勝負が決まるといえる<sup>31)</sup>。

といわれたが、その「科学」はこの頃流行のアメリカ社会心理学<sup>32)</sup>がつかわれた。かくて、「これからの成功戦術」は「従来の精神訓話的なものにならない合理的な方法」として「モチベーション・リサーチ」がもちだされた<sup>33)</sup>。

しかし、戦前の成功(出世)の方法が完全に払拭されたわけではない。戦前の価値意識の持主である実業エリートも多くの成功読本や成功に関する記事をかいているからである。土方文一郎は、この時期の成功読本を「アイデアもの」と「交際の技術もの」にわけ、さらに心理学の「同化・異化の原理」をつかって、つぎのようにいう。異化の法則によって目立ち、同化の法則によって全体の部分として適合する。「アイデアものは前者の教科書であり、『交際の技術』ものは同化的思考の案内書である」と<sup>34)</sup>。このような区分をつかえば、これまでのべてきた成功の方法は、主として「アイデアもの」の系列となろう。「交際の技術もの」には戦前との連続面が多い。「アイデアもの」がレファレントにする職場の仕事の場はともかく、「交際の技術もの」がレファレントにする職場の情趣的結合の場は、戦前とくらべて大きな変化がないことによるのであろう。

## (2) 大きな成功(出世) = 有名というコンセプトが台頭してきたこと

日本の立身出世主義は、「なにをしたい」のではなく、「なにになりたい」という動機づけのかたちをとるということが作田啓一によって指摘されている<sup>35)</sup>。ディビス(K. Davis)の用語<sup>36)</sup>でいえば、日本の立身出世主義は役割遂行(「すること」)にともなう評価である「声望」(esteem)にではなく、地位(「であること」)にともなう評価である「威信」(prestige)に動機づけられているということになる。このような作田の見解は卓見であるが、「なにをしたい」「声望」(esteem)に動機づけられた立身出世主義がなかったわけではない。〈功名的立身出世主義〉がそれである。

31) 松本順『成功術入門——心理学応用——』池田書店、1961年、「はしがき」。

32) 戦後の心理学ブームは、南博『社会心理学——社会行動の基礎理論』(光文社、1949年)を皮切りとしている。この本は2万部売れたという(神吉晴夫「私の戦後史：創作出版の三十年③」『週刊読書人』1975年4月19日号)。

33) 松本順『これからの成功戦術』実業之日本社、1960年、14頁。

34) 土方文一郎「成功ものの効用」『日本読書新聞』1958年5月5日号。

35) 作田啓一「立身出世」『現代社会心理学第8巻』中山書店、1963年、59頁。

36) K. Davis, Human Society, Macmillian Company, 1948, PP. 93~94.

戦後の成功ブームと成功（出世）観（竹内）

立身出世は「名を挙げる」あるいは「功名」と表現され<sup>37)</sup>，“ambition”は「功名心」と訳された<sup>38)</sup>が、「功名」とは「であること」にともなう「威信」というよりも、「声望」に関連している。『成功』第20巻第6号（1911年）のつぎのような巻頭言は、＜功名的立身出世主義＞のそのような有様をよく示している。

◎抑も英雄偉傑とは何ぞや。英雄偉傑とは、非凡の大業を遂行せるインモータル、マンを意味す。即ち政治と軍事と學術と実業との何たるを問はず卓越せる行動に依りて、その芳名を不朽ならしめたる大人物を云ふ。

◎男子世に生れ、何ぞ碌々として醉生夢死すべけんや。須らく一生を聳動する大業を遂行して、其芳名を不朽に伝ふる処なかるべからず……（傍点引用者）。

アメリカの成功者が金貨や札束とともに描かれるのにたいし、日本の「出世雛形」は演説しているところや武名として描かれている（図4）。このような彼我のちがいは＜功名的立身出世主義＞

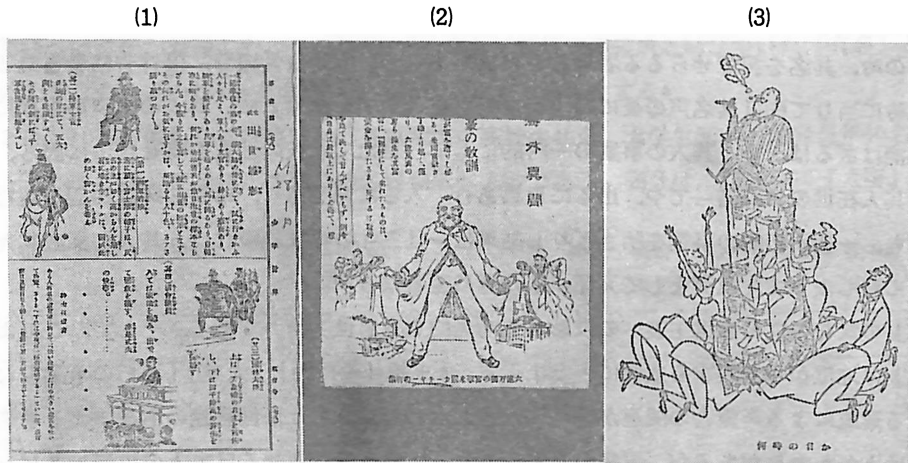


図4 成功（出世）の絵の日米比較

（資料出所）(1)『少年世界』1895年1月号，78頁，(2)『成功』第1巻第1号，1902年，49頁，(3)S. Mead『苦勞なしに成功する世渡り心理学』鱗書房，1955年，4頁。

(2)，(3)は和書に掲載されたものであるが，(2)は「海外異聞」の欄に載っているから，“Success”誌掲載のものであろう。(3)は翻訳書であり，原書の絵をそのまま掲載したものであろう。

37) 新渡戸稲造はつぎのようにのべている。

「富にあらざり，知識にあらざり，名譽こそ青年の追い求めし目標であつた。多くの少年は父の家の敷居を越える時，世にいでて名を成すにあらざれば再びこれを跨がじと心に誓つた。しかして多くの功名心ある母は，彼らの子が錦を衣て故郷に還るにあらざれば再びこれを見るを拒んだ。恥を免がれもしくは名を得るためには，武士の少年はいかなる欠乏をも辞せず，身体的もしくは精神的苦痛の最も厳酷なる試練にも堪えた」

（新渡戸稲造著，矢内原忠雄訳『武士道』（1899年）岩波文庫，1938年，76頁。

38) たとえば『成功』第6巻4号（1905年）英語欄の“Success”誌記事のつぎのような対訳（「学校卒業生の職業を得ざる原因」）がそれである。

How many have learned to get possession of themselves, and to press forward toward the goal of their ambition with energy and decision……幾何の者が能く是等の実践を得るやう学び，而して元氣と決心とを以て其功名心の目標に前進し得るやう研究せしや（傍点引用者，同誌54頁）。

義〉によるとおもわれる。

〈功名的立身出世主義〉がどうして日本社会に誕生したかについてここで詳しく立入ることができないが、そこにはすくなくとも日本人の来世意識の欠如<sup>39)</sup>と〈抜群アスピレーション〉が関連しているとおもわれる。来世の存在を信ずることができなければ自己の存在を現世での「名」として残すより他はない。すでにみた『成功』第20巻6号の巻頭言の「芳名を不朽ならしめ」る「インモータル・マン」とはまさしくそれであるが、同じく『成功』掲載の「不朽の事業」と題するつぎのような記事は来世意識の欠如が名声志向にむかう筋道を語ってあまりあるとおもわれる。

人間天地間に生れ、正に如何なる事業を為して此世を終るべき、是れ生きとし生ける人類の必ず一度は胸中に起すべき疑問なり、然れども、彼等の中果して何等かの貢献を此世界人類の爲めに爲し、而して墓中に入る者幾何かある。……思ふて茲に至れば我等悵然として嗟嘆せざるを得ず、噫百歳の後、是等の人の骨皆冷かに、墓木又正に拱ならんとするの時、其名を記憶せらるる者果して幾人かあるや、所謂傲骨媚骨、佞骨皆枯骨と爲る、此時に当りて尚ほ其名声の後に輝く者幾何かあるや、余輩思ふに、其人の名声の後代に輝く能はざるは、全く其人の事業の一時的にして、絶えて永久の性質を有せざるに因る、即ち其人在世の日に当ってや、出るに車馬あり、入るに婢妾あり、珍膳佳味其四辺を埋むれども、一個不朽の事業を胎さざりし結果は一旦三寸の呼吸絶ゆれば、其人の權威其死と共に没し去りて、寂寞として又聞ゆるなきに至るなり<sup>40)</sup>。

「名」の文化の立身出世主義への投影が〈功名的立身出世主義〉である。そして、このような「芳名」は地位から放射する威信にとどまらず、「卓越せる行動」「大業」「不朽の事業」などの赫々たる達成による声望との関連が深かったとおもわれる。また来世意識の不在による功名への水路づけとかかわりがあるが、群衆の喝采を博し、大向うを唸らせる日本人の抜群アスピレーションの立身出世主義への投影が〈功名的立身出世主義〉でもあった。「抜群」も地位の階段の登攀によるだけでなく、赫々たる達成と関連していた。

だが、このような「功名」は「有名」とは異なる。戦前においては、「功名」は国家や所属集団への貢献という特定化した(specialized)達成を離れては考えられないものだった。

それゆえ『成功』第25巻第6号(1913年)のなかの「実業界成功の四条件」(山本久頭)は、つぎのようにいう。

単に成功と云うと其の意義が如何にも広汎であるが、政治家であるならば國家に貢獻する大事業を成して名を為すは所謂成功であらう、又学者ならば夫々の専門に於て獨創の新學説を立てて、學問界に大なる貢獻を爲して名を揚げるのが所謂の成功であらう、又実業家としてならば大いに金を儲け実業界要用の人々となるのが成功であらう。……

39) 森三樹三郎『「名」と「恥」の文化』講談社現代新書、160頁。

40) 村上濁浪「不朽の事業」『成功』第7巻2号、1905年、28頁。

### 戦後の成功ブームと成功（出世）観（竹内）

そこで実業家として成功しやうと思ふものの先づ第一番に考ふべきことは、仕事の性質を選ぶと云うことである。単に金が儲かると云って更に國家などと云ふ觀念を持たず、若しくは國家的の觀念をば相容れざるが如き仕事を選ぶと云ふことは断じて避けなければならん。……高利貸は果して國家に対して如何なる位置にあるか、如何なる影響を与へつつあるか。どう云う点で國家に貢献して居るか。

かう云ふ仕事で仮令或程度まで金を儲け得たとしても恐らく尊敬する人は一人もあるまい。寧ろ或は擯斥される位のものであらう。其れでは名を揚げると云う成功の定義と違ふではないか（傍点引用者）。

ここには成功と國家ないしは所属集團への貢献と功名とのさきに示した連関が集約して表現されている。

ところが、敗戦後國家、所属集團への貢献価値がいちじるしく下落すると、「功名」から國家、所属集團への貢献が離脱した。その結果、「功名」は無規定の達成と結びついた「有名」となる。ここに大きな成功（出世）＝有名というコンセプトが誕生する。

表2は、1956年に社会心理研究所が東京都内の高校生40名、大学生50名、勤労青年40名を被調査者としておこなった現代の成功者の各界別延べ人数である。表3は、1909年に『太陽』編集部

表2 戦後（1956年）の成功者コンセプト

	延べ人数	パーセント
政治家	54	42
作家・評論家	26	20
学者	10	8
財界人	9	7
芸術家	7	5
芸能人	6	5
スポーツマン	4	3
社会運動家	2	2
宗教家	1	1
その他	10	8
計	129	100

（資料出所）社会心理研究所「若い人たちの『成功観』の実態」『知性』1956年12月号、59頁より作成。

表3 戦前（1909年）の成功者コンセプト（新進二十五名家）

	人数	パーセント
政治家	10	40
学術界	4	16
文芸	4	16
宗教	3	12
民間経済	1	4
ジャーナリズム	1	4
芸能人	1	4
スポーツ	1	4
計	25	100

（資料出所）「新進二十五名家」『太陽』第15巻第9号、1909年、より作成。

（博文館）が読者に「新進二十五名家」の投票をもとめたときの各界別人数である。「新進二十五名家」は、「成功者」というかたちをとってなく、「名家」であり、各界物人数は『太陽』編集部によってあらかじめ決められていた。その意味で、表2と表3の単純な比較はできない。しかし、社会心理研究所の調査（表2）は、被調査者が任意に成功者名（1名）をあげているが、

それでもなお成功者がいろいろな領域に分散していることに注意すべきだろう。すでにのべたように表2と表3の単純な比較はできないが、戦後の成功コンセプトにしめる作家、評論家、財界人、芸術家、芸能人などの割合はふえているとみてよいだろう。

社会心理研究所は表2の解釈のなかで「一見して感じるのはこの序列がマスコミュニケーションの報道量に比例しているということである。……とにかくマス・コミの世界で大きくとり上げられた人々が注視的<sup>41)</sup>になっているとのべている。「昔は大臣、いまは小説家」が出世の頂点<sup>42)</sup>といわれる所以である。このような大きな成功(出世)=有名というコンセプトの端的な表現は、1951年に刊行された『無名から有名へ』という本にみることができる。この本の副題は、「出世近道の手引」であり、「あとがき」はつぎのようにいう。

この頃の若いひとびとは、作家や画家や俳優などになりたがっている。一般の就職難からくる何らかの反映と思われるが、それよりも寧ろ戦後の芸術家や芸能人の華やかさ、名声のすばらしさへの憧れによるのであろう<sup>43)</sup> (傍点引用者)。

もちろん、有名が戦後の成功(出世)コンセプトのすべてをつくしているわけではないが、大きな成功(出世)=有名というコンセプトの傾向が強くなったことは注目すべきだろう<sup>44)</sup>。

大きな成功(出世)の「功名」から「有名」へのこのような変化は、同時に、成功(出世)観念の多元化でもある。戦前の立身出世の極致は、大礼服を着て天皇に拝謁するにあった。1890年刊行の「男子教育双六」(揚斎延一画)は「ふりだし」が男子出産で、「上り」は国会議事堂であるが、この双六の紙袋には明治天皇と皇太子がかかされている。『新選少年教育世界漫遊双六』(石井定、1893年)の「上り」は、留学から帰朝して天皇に拝謁する画である。だが、戦後このような成功(出世)の一元尺度がくずれると、大きな成功(出世)=有名となり、表2でみられたように、成功者のコンセプトはスポーツ選手、俳優などあらゆる領域の有名人に拡

41) 社会心理研究所「若い人たちの『成功観』の実態」『知性』1956年12月号、60頁。

42) 石川達三他(座談会)「文芸内閣 出世論争」『文芸』1964年4月号、231頁。

43) 海道守編『無名から有名へ——出世早道の手引』神正書房、1953年、294頁。

44) 大きな成功(出世)=有名というコンセプトは、しだいに昂進している。最近「タレント」が書いた本がベストセラーになっており、それは、一種の現代立志譚となっていることに注目すべきであろう。もちろんそこにはかつての立志譚とはちがった意味づけがなされている。ここではこれ以上立ち入らないが、清水哲男(「現代立志伝の流行——現代タレント本ブームの周辺——」『週刊読書人』1976年4月19日号)は、その点についてたとえばつぎのような分析をしている。

「むしろ、いまの若い読者が立志伝に読みとるのは、その感動を感動として生かすことになったその根底にある成功者のラッキー・チャンスがどのあたりにあったのか、ということのほうなのだ。……どんなに努力したところで、いまの世の中で成功するためには、スカウトされなければどうしようもないという現実。その現実を絵に画いてみせたのが、これらの本の内実なのでなければならない。……すなわち、芸能界は、現代的出世構造のみやすいサンプルだということなのだ」。

戦後の成功ブームと成功（出世）観（竹内）

散<sup>45)</sup>される。かくて、労働組合の幹部になることも「新しい成功」<sup>46)</sup>といわれるようになる。

しかし、組合委員長や焼き鳥屋の出世のゴールが国会議員におかれる<sup>47)</sup>ところに、戦前の成功（出世）観念がなお戦後にも跡をとどめていることをみることができるが、天皇への距離という成功（出世）尺度が大幅に後退したことは否めない。これにかわって序々に台頭してきたのが金銭尺度である。

（3）成功（出世）の尺度がしだいに金銭になってきたこと

成功とは業績の社会的認承であるが、報酬としての金銭はさまざまな部分領域における業績をヴィジブルにし、異質な業績を全体社会の平面で比較秤量する有効な手段である。ウィリアムス (R. M. Williams) は、アメリカ社会において成功のシンボルが金銭であることの理由をつぎの三点にみている。

アメリカ社会はさまざまな職業がある高度複合社会 (highly complex society of diverse occupations) であり、それぞれの分野における業績に必要な能力、努力は異質である。それゆえそれぞれの職業における業績それ自体は比較秤量の指標になりえない。そこで金銭がそれぞれの分野の異質な業績の比較秤量的手段とされた。これが金銭が成功のシンボルである理由の第一点である。第二の理由には、アメリカ社会では商業や製造業や財政問題における業績が高く評価されたから、金銭が成功のシンボルとなったことがあげられている。最後にアメリカ社会では階級制の伝統とそれにとまなう地位シンボルが未発達であったことがあげられている<sup>48)</sup>。

戦後の日本社会でしだいに金銭が成功（出世）尺度となってきたのは、金銭を成功のシンボルとするアメリカ社会におけるいま紹介したような特徴が戦後日本に生じたからである。

戦後のいちじるしい経済復興と発展によって、金銭を成功のシンボルとすることにあずかったウィリアムスのいう第一点の理由に該当する状況が日本社会にも生じた。そして、国家目標が経

45) 藤原弘達による「青年層の政治意識」調査 (1956年) においても「尊敬する人物」の欠如 (60.6%)、分散がみられる (『現代日本の政治意識』創文社、1958年、240～242頁) が、このことは成功観念の多元化とパラレルな現象である。

尊敬する人物

尊敬する人物	実数	パーセント	尊敬する人物	実数	パーセント
なし	1,073	60.6	恩師、校長	20	1.1
リンカーン	47	2.7	父	18	1.0
福沢諭吉	42	2.4	キューリー夫人	17	1.0
二宮尊徳	41	2.3	西郷隆盛	17	1.0
親	41	2.3	その他(1%未満)	368	20.8
天皇	33	1.9			
野口英世	31	1.6			
母	23	1.3	計	1,771	100

(資料出所) 藤原弘達、前掲書、付表99～105頁より作成。

46) 石森健吉『成功をする人のために』鷺の宮書房、1957年、序文。

47) たとえば永田久光、前掲書 (光文社)、92頁、戸川行男『新・立身出世論』筑摩書房、1957年、9頁など参照。

48) Robins M. Williams, American Society, Alfred A. Knopf Inc., 1950, PP. 420～421.

済発展（経済ナショナリズム）におかれるにつれ、官界、学界の価値が低落し<sup>49)</sup>、経済の領域の価値が高まり、そこでのメディアである貨幣が社会的に重要なメディアとなった。これはウィリアムスのいう第二点に該当する。さらに敗戦による「下向的平準化」、斜陽族化の進行は戦前の階級制とそのシンボルを崩壊させたから、ウィリアムスのいう第三点に該当する状況が戦後の日本社会にも生じた。

こうして、しだいに金銭が成功（出世）尺度となってくるが、このような傾向は今日まで単調増大化している。事実1973年の「スティタス・シンボル調査」（日本経済新聞社）では、社会的地位の決定要因としての金銭（「財産」「収入」）はSSM調査（日本社会学会、1955年）以上に順位があがってきている<sup>50)</sup>（図5）。

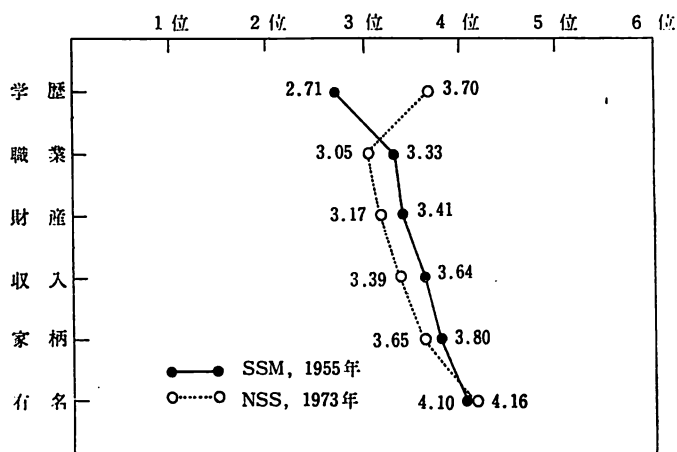


図5 社会的地位の決定要因（東京都区部男子の平均順位）

（資料出所）門脇厚司「現代日本の出世観」日本人研究会編『日本人研究 No.1 日本人の心は変わったか』至誠堂、1974年、138頁。

つぎのある国立大学助教授夫人の言葉は裏がえしのエリート臭が感じられなくもなく、その意味では嫌味（？）でもあるが、現代社会において金銭的達成の価値のウェイトが増大していることを極端なかたちで示しているといえよう。

ここでは私たちは、ひどく軽蔑されています。貧乏だからなんです。大学の教官？ああ

49) 1886年生れの石坂泰三は、1957年につぎのようにのべている。「大学の先生の次は役人になること、その次のものが実業方面に行くという順序だった。現在は必ずしもそういうことはなからう。とにかく、その時はそういうふうになれども考えていた。……いなから出てきた学生なら、だれでも役人になることが、プロフェッサーになることについての希望だったわけである」（傍点引用者）。（『私の履歴書』『私の履歴書2』日本経済新聞社、1957年、35頁）。

50) ここで注意したいのは社会的地位の（人々が考えている）決定要因のなかで「有名」は、SSM調査、NSS調査のいずれにおいても最下位であることだ。このことは一見本稿のⅢの(2)で示した大きな成功（出世）＝有名という仮設を否定するかにみえる。だがこのような調査結果は、それが大きな上昇移動を問うているのではなく、微妙な社会的地位の決定要因を問うているからであろう。その意味で本稿で提示した大きな成功（出世）＝有名という仮設がこれらの調査データによって否定されているとはおもわれぬ。



そんなものは、全く尊敬の対象にはされません。ここではドロボーしていたって、とにかく経済的に豊かな人ほど、尊敬されるんです。清貧？そんなものは今では死語ではないでしょうか。貧しいことは悪なのです。ですから私たちは、ひどく片身のせまい思いで暮しています。すくなくとも、この団地の奥さんたちの間ではそうなんです<sup>51)</sup>。

成功（出世）の尺度が天皇への距離から金銭尺度にうつりはじめたということは、成功（出世）が国家、所属集団への貢献価値の実現というかたちで考えられることがすくなくなり、純個人的な欲求充足として考えられるようになったということでもある。このような変化をよくあらわす事例は1880年生れの鮎川義介と1965年頃の大学生のつぎのような言葉にみることができる。

ひろん立身出世は望むけれども、国のためにやるという裏付けがあつてのことである（鮎川義介<sup>52)</sup>）。

要するに私の将来への展望は、人生を享樂していくという希望の枠内においてしか存しない。立身出世もこれに従属する要素にすぎない（1965年頃の大学生<sup>53)</sup>）。

戦前社会は「ホンネ」が「タテマエ」によって聖化されたのにたいし、戦後社会では「ホンネ」の表出それ自体が反俗（ノ）として聖化されるということを検討すれば、鮎川の言葉は「タテマエ」に傾き、戦後の大学生の言葉は「ホンネ」に傾きすぎているわけだが、それにしても両者のちがいは大きい。戦前の成功（出世）が国家、所属集団への貢献をふまえて評価されたのにたいし、戦後はそれが純個人的な欲求充足からみられ、それ以上の何物でもないというのがさきに引用した大学生の言葉であろう<sup>54)</sup>。

戦後芸能人やスポーツ選手が成功者の花形となったのは成功（出世）が個人の欲求充足の函数として考えられるようになったことと関連している。芸能人やスポーツ選手は消費の英雄（大邸宅、最新型の自動車など）でもあるからだ。

#### （4）安定と消費に動機づけられた小文字の出世主義が台頭してきたこと

成功（出世）が直接に純個人的な欲求充足と結びつくようになれば、当然大きな成功（出世）ではなく安定と消費に動機づけられた小文字の成功（出世）志向が台頭してくる。

51) 深谷昌志・深谷和子『現代子ども論』有斐閣、1975年、60頁より引用。

深谷は、現代の母親が子どもを叱るとき一番多いのが経済的損失にかかわることであるという調査結果から現在子どもたちが金銭的達成へむかって強力的に社会化されているのではないかと、「現代社会の最高の達成は、実は金銭的達成で、他の達成はすべて金銭的達成をカムフラージュする仮面にすぎないのかもしれない」（61頁）という仮説を提起している。

52) 鮎川義介「私の生活信条」山田勝人編『私の生活信条』実業之日本社、1953年、19～20頁。

53) 日高六郎「青年の自画像」副田義也編『現代のエスプリ N. 86 青年』至文堂、1974年、24頁より引用。

54) 1958年に発足した学生問題研究所は、翌年（1959年）「現代の学生をどうみるか」の懇談会を開いているが、そこでつぎのような発言がなされている。「打算的にものを考えますから、たとえば権威というものの考え方が、非常にちがっている。……権威といわれるものと自分たちとの関係を考えて、その相手方が自分にとって価値があるか、効用性がどれほどであるかということを考える。効用性をみとめる相手に対しては尊敬するような態度をとるのです」（尾崎盛光『第三の世代——現代の学生群像——』法律文化社、1960年、8頁より引用）。ここでも個人的な欲求充足が価値を決定する傾向が新しい世代の特徴としてのべられている。

このような出世観は基本的な価値（人生目標）観の戦前と戦後の変化に関連している。それは戦前の壮丁検査と戦後の青年の生きがい調査にみることができる。戦後における「公につくす」

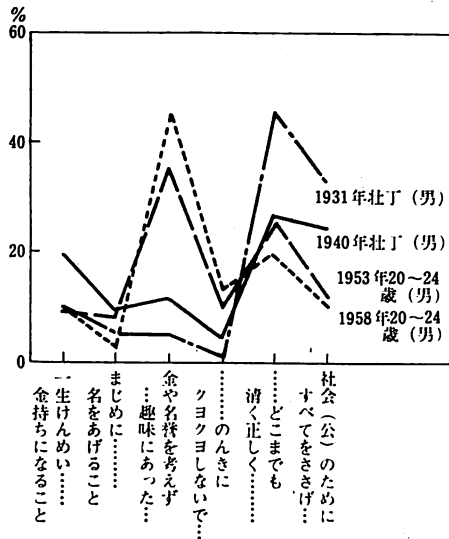


図6 日本青年の戦前と戦後の「くらし方」  
 (資料出所) 統計数理研究所国民性調査委員会『日本人の国民性』至誠堂、1961年、128頁。

「名をあげる」の低下と「趣味に合う生活」「のんきに」生きることの増大がそれである(図6)。そして、このような私生活主義がホンネ価値にとどまることなく、タテマエ価値として聖化されるようになったということが重要であろう。「普通人」「小市民的理想」<sup>55)</sup>が表通りを闊歩するようになった。

このような意識の変化は藤原弘達による1955年調査にもあらわれている。「家を愛するということは何を意味するか」という問にたいして農村部では依然として「家名をあげること」「家を富ますこと」などが比較的多くみられるが、都市部ではそのような項目の選択率は低い。「子供を幸福に

すること」(42.7%)、「親を大切にすること」(20.4%)、「夫婦仲よくすること」(14.6%)がベスト・スリーである<sup>56)</sup>。また、ごく普通のサラリーマンの日常生活の哀歎を描いた『サラリーマン目白三平』がベスト・セラーになり、「三平氏から平凡な家庭の幸福のあり方を教えられた」「三平氏のような平凡なサラリーマンになりたい」という投書<sup>57)</sup>や平均人、普通人を示す「平均」(『日本無責任時代』東宝映画、1962年)、「江分利満」氏<sup>58)</sup>(山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』1963年)が映画や小説の主人公になってきたことにもそのような傾向をみることができる。

このようにして大きな成功(出世)ではなく、安定と消費のための小文字の出世が望まれるようになる。

すでにみたように戦前においては、出世の尺度は一元的であったが、出世のルートは官界、経済界などにおける地位登攀以外に軍隊、各種検定試験、裸一貫から実業家への道、海外移住など多元化していた。ところが戦後は独占資本主義の確立ともあいまって出世のルートが相対的に一

55) 松下圭一「戦後世代の生活と思想(下)」『思想』岩波書店、424号、1959年、91頁。

56) 藤原弘達、前掲書、157頁。

57) 南博『社会心理照魔鏡——1956年版——』光文社、1956年、52頁より引用。

58) 「才能のある人間が生きるのとはなんでもないことなんだよ。宮本武蔵なんて、ちっとも偉くないよ、アイツは強かったんだから。ほんとに『えらい』のは一生懸命生きてる奴だよ。江分利みたいなヤツだよ。匹夫・匹婦・豚児だよ」(困ってしまう)『江分利満氏の優雅な生活』文芸春秋新社、1963年、69～70頁)。このような凡人志向を主張した本がベストセラーになったことは普通人、凡人志向の市民権の獲得過程を示す。

元化し、成功（出世）はサラリーマンとしての地位登攀が主要なルートになった。出世のゴールも小林一三や五島慶太のようになることは「今日ではちょっとむづかしい」としてつぎのようにいわれる。

- 1 五十五歳の停年まで無事に勤めあげて会社をやめたとき、自分の住む家を持っていること。退職金で自分の住む家を買うようではいけない。
- 2 退職金として二～三百万円を貰い、
- 3 会社に在職中蓄積した現金と株式とで百万か二百万あること。
- 4 息子が一流の大学を出て、一流の会社に就職出来ているか、娘なら将来のある青年に嫁入出来ていたなら、  
そのサラリーマンはまず繁榮しているということが出来る<sup>59)</sup>（傍点引用者）。

また、『週刊現代』1960年1月24日号「新しい現代の出世法」は「天下を取るにはこの手段」という大きな出世目標を見出しにしているが、記事はつぎのように書かれていて、その落差がはなはだ興味深い。

男と生れたからには、天下を取るの気概がなくてはならない。サラリーマンたるもの、一度は社長たらんと胸に画く。たとえ社長はダメでも重役。重役たらずとも、せめて課長ぐらゐにならなくては生き甲斐がない。しかし、課長になるにも、ぼんやりしていたのではなかなかかなれるものではない（傍点引用者）。

以上の二つの引用文に安定と消費に動機づけられた小文字の出世主義、「出世主義のサラリーマン化」<sup>60)</sup>をみる事ができよう。

だからこの時期の成功読本には、「人間関係の機微」<sup>61)</sup>をつかむための本、あるいわ、「日常生活の諸問題のために打ちひしがれている」<sup>62)</sup>人々のための本が少なくない。日常的な小さな成功が対象とされているからである。

---

59) 菅谷重谷『サラリーマン教室』東京創元社、1957年、28頁。

60) 松下圭一、前掲論文、92頁。

『螢雪時代』1955年7月号は、都立高校に補習科が設置されたことを報じ、「浪人の激増が最近喧しく伝えられ、巷には『予備校』が氾濫し、分校、新校舎が続々と増築され、読者からは予備校についての質問がかなり殺到している。まさに『予備校ブーム』の観がある」（「浪人増加の原因を衝く」）とのべている。1955年前後に浪人、予備校ブームが生じた。1957年東京大学入学者をみると、現役はわずかに27.7%であり、72.3%が浪人である。浪人中一年浪人64%、二年浪人25%で、三年以上浪人が11%もしめている。（清水義弘『試験』岩波書店、1957年、32頁より計算）。このような浪人、予備校ブームは大企業への就職、成功の度合いがあらかじめ割り当てられている「経歴上の成功」（K. Mannheim）に有利な特定大学への集中であり、さきののべた「出世主義のサラリーマン化」と大きな関係がある。

61) D. Carnegie, How to Win Friends and Influence People, Simon & Schuster, 1936, 山口博訳『人を動かす』創元社、1958年。

62) N. V. Peale, The Power of Positive Thinking, Prentice-Hall, 1952, 相沢勉訳『積極的思考の力』ダイヤモンド社、1954年、1頁。